

ご本山だより



大本山永平寺

山門 さんもん



永平寺の正式な玄関である山門は、だれもが自由に出入りすることが出来るわけではありません。出来るのはただおひとり、永平寺の住職である禅師さまでだけです。しかし、永平寺の修行僧は生涯に二回だけ、この門を通ることが許されます。一回目は、修行のはじめの第一歩の時です。修行の決意を固め、お師匠さまや家族、檀信徒や友人に見送られてきた修行僧は、緊張と不安のか、長時間寒さに耐えやっと入山の許しを得て山門から入ります。二回目は、永平寺から去る時です。永平寺での修行に区切りをつけた修行僧は、辛く厳しい修行を共に過ごした仲間との別れを惜しみつつ、三度のお拝を行い「お世話になりました!」と大きな声で永平寺にお礼をし、仲間に見送られ山門から去って行きます。修行僧たちにとって山門は、思い入れの深い大切な場所となるのです。

二月十四日に、昨年十一月から始まった、約三カ月間の禁足修行である冬制中ふゆせいちゅうが解かれます。そして十八日から新しい修行僧たちしんぎんが上山はじめ、時を同じくし永平寺を去る修行僧がおります。

二月の永平寺山門は、来る者と去る者が行き交う出会いと別れの時節であり、それぞれ決意を新たに、終わりにき修行に励んでゆくのです。

ご本山だより



大本山總持寺



節分追儺式と釈尊涅槃会

二月三日は節分の日です。總持寺でも毎年大祖堂で賑やかに追儺式が執り行われ、一〇〇人を超える年男・年女が著名人とともに袴姿で参加いたします。

まず、禪師さまを大導師に御祈禱が行われ、東日本大震災被災地の復興や人々の無病息災・心願成就・諸縁吉祥を祈られます。厳粛な法要が終わると、禪師さまの「福はく内」という掛け声を合図に、一斉に豆が堂内にまかれます。何回かに分けて豆まきする内に、二千人近い参拝者の歓声で千疊敷の堂内は熱気を帯びてきます。豆まきが終了すると、著名人たちによる福引き抽選会が行われ、節分会の楽しみを更に盛り上げます。

二月十五日はお釈迦さまの亡くなられた日です。お釈迦さまを追慕する「涅槃会」が仏殿で行われ、色とりどりの涅槃団子が涅槃図の前に供えられます。かつて与謝野晶子氏が「胸なりてわれ踏みがたき 氷より澄める 大雄宝殿の床」と詠んだ仏殿ですが、この日はひとときわ静寂な雰囲気包まれます。僧堂ではお釈迦さまを慕っての「涅槃会報恩損心」が三日間行われます。

また、修行に節目をつけた僧がそれぞれの出身地に帰り、新しい修行僧が続々と上山してくる時季でもあります。

曹洞俳壇

選・村松五灰子

水澄めりきこんたの音^{こたま}研して

山口県 御江やよひ

評 今も昔ながらの水車の力で、土を砕いて焼き物作りをする所があるのだろう。山里に長閑な杵の音が聞こえる。水の輝きが見えるようだ。

秋真昼臥床の妻のVサイン

群馬県 山本 俊久

評 抜けるような秋の空。恙^{さや}の身体も軽く気持ちが良い。Vサインして見せる可愛い奥さんである。

◆ 廃駅の余儀なき村に冬の来る

秋田県 小田篤恭葉

◆ 山風や午後は晩稲^{おくれこめ}を刈る予定

京都府 藤野 繁

◆ 障子貼り遺影の父母を喜ばす

岩手県 上沖 貞子

◆ 紅葉の時だけ自慢出来る村

福島県 西木 甚

◆ 山霧や子に抱かるる白い箱

神奈川県 小橋 幸

◆ 吾子駆けるボールを追って落葉踏む

千葉県 保坂 宗林

◆ 新米や飛騨春慶の弁当箱

東京都 伊奈 三郎

◆ マーキングされし蝶来る藤袴

愛媛県 井上 征郎

◆ 石路の花坂の途中の能舞台

愛知県 松井 暁見

◆ 鈴虫の土産をさげて子の帰る

長崎県 崎田 定雄

* 選者吟

盆梅の百に疲れて抹茶席

五灰子

* 作句小見

以前滋賀県長浜の盆梅展を見て驚いた。何百年にもなる老樹が大勢の手で守り伝えてきた美しさに目を見張った。また過疎の里に咲く白梅の潔さも好ましい。梅を見るときは一人が良いと思っている。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

右隣左隣に挟まれて空き地の薄すくすくと
伸ぶ

宮城県 須藤智恵子

評 空き地を言うのに「右隣左隣に挟まれて」と表現するのはなぜか。元々そこには家があったからに違いない。東日本大震災後の復興も徐々に進んでいるとはいえ、まだまだの様子

葉つきなる高枝ばさみに取りし柿空の香り
をほんのり残し

愛知県 田中 澤子

評 「空の香り」は柿がたわわに実って漂わせる柿の匂いでもある。感覚的な詩的な表現が、秋の実りの豊かさを表現している。

◆ 秋の陽に照らふ式部の紫にむらさき好みし母を恋ふなり
◆ 五年ぶりに木戸川鮭漁再開にやな場の空に歓声あがる

長野県 両角 徳子
福島県 大槻 弘

◆ 赤き実のいよいよ赤し朝靄の庭に佇ちたり夫の命日

山形県 多田 さよ

◆ 仕舞湯に口ずさむのは誰ならむ夫の「さざんかの宿」

山形県 菊池 恵

◆ 黄金の稲穂に遊ぶ蝗^{せみ}見て戦後の食卓ふと思い出す

北海道 中野 久子

◆ 正の字を日記の隅に書き記す今日一日のしくじりの数

山形県 横山 稔吾

◆ 遠き日に娘が作りし庭隈のインコの墓に秋茜さす

北海道 吉田 洋子

◆ 寒き夜を震度三に襲はれて布団をへぎて逃げる準備す

岩手県 阿部 瀬子

◆ ひところは生まれ変りたく思いしも激しき変化におじけつく今

カリフォルニア 井上 健一

◆ 一心に着地点を探してる冬枯れの目にさまよう小雪

秋田県 小松 紀子

*選者詠

思ひ出した大切なことあるようにつと傍ら
を立ちてゆく犬

ちづ

*作歌小見

時代の急速な変化についてゆけない感覚を詠われた井上さんはアメリカからの投稿。世界が平和な良い方向に変化することを願わずにはいられません。